HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	考慮の前提である余地と決定論の両立性 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	本間, 宗一郎
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15991号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92370
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Souichiro_Honma_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　本間　宗一郎

審査委員　主査　准教授　近藤　智彦
　　副査　准教授　宮園　健吾
　　副査　教　授　竹澤　正哲
　　副査　准教授　太田　紘史　（新潟大学）

学位論文題名
考慮の前提である余地と決定論の両立性

世界のありようが自然法則と過去の状態によって一通りに定まるとする決定論と、われわれ人間が自由意志をもつことは両立するのか、という決定論と自由意志の両立問題は、古来論じられてきた哲学の根本問題の一つである。本論文はこの問題に対して、主に現代分析哲学における研究動向に棹差しつつ、独自の観点から見通しを示している。実際にした行為とは異なることができること――近年の用語法では「余地（leeway）」――を自由意志の要件とみなしてきた伝統的な理解に対して、近年は余地を自由意志の要件とはみなさない立場も一定の支持を集めてきた。これに対して本論文は、同時には行うことができない選択肢の中からどの行為を選ぶかを決める過程――すなわち考慮――という局面に注目し、考慮の前提となっている余地は依然として自由意志にとって重要であることを示した上で（第１章）、あらためて余地と決定論の両立問題に取り組んでいる。本論文は、道徳的責任の前提となる自由意志に議論が集中している現在の研究動向のなかで、考慮という観点から決定論と自由意志の両立問題に迫っている点で独自性があり、それをこれほどの規模で一貫して展開した研究としては類例のない力作となっている。

考慮の前提となっている余地と決定論に関する両立論を擁護するにあたって本論文が最終的に採用するのは、信念的偶然性にもとづいて余地を理解する立場、すなわち、考慮の前提となっている余地を、考慮者がもっている信念に照らしてどの選択肢を行うかが特定されていないこととして理解する立場である。本論文は、最終章（第６章）で自身の立場を展開するのに先立って、他の余地両立論の立場を取り上げ、その各々に綿密な批判を加えている（第３～５章）。その際には、本論文の論旨にとって都合のよい議論のみではなく、現在の研究のなかで有力とされている主要な立場がおおむね取り上げられており、その点で本論文は、余地両立論に関する現在の研究状況を、考慮という一つの観点から批判的に一望できるものともなっている。

本論文の各章で展開されている議論も高度な専門性を具えており、それぞれが堅実な学問的貢献をもたらしている。第２章は、決定論と余地の非両立性を示す論証として現代の議論の参照点となってきた帰結論証（consequence argument）を取り上げ、その妥当性をめぐって展開されてきた近年の研究動向をまとめたものである。本論文のなかでは後の議論の準備となる先行研究のサーヴェイとして位置づけられるものの、論理学を用いた込み入った議論の応酬をこれほど詳細に辿った論述自体、少なくとも日本語では例を見ない（実際、本章の主要部は応用哲学会の学会誌 *Contemporary and Applied Philosophy* 13 (2021-2022)にサーヴェイ論文としてすでに採用・掲載されている）。第３～５章は、検討されるそれぞれの立場に関する先行研究を利用しながらも、考慮という観点から一貫した批判を展開している点で新たな貢献を示している。引き返し（backtracking）余地両立論、局所的奇跡両立論、傾向性両立論については、それらがいずれも考慮の前提となっている余地を適切に捉えていないことを、「考慮における所与テーゼ」と「考慮における現実主義」という二つのテーゼを導入することで説得力をもって示すことに成功している。また、ヒューム主義的両立論および非還元的物理主義に訴える両立論が抱える難点を示すにあたっては、帰結論証や物理主義をめぐる独自の綿密な考察を行っている（このうちヒューム主義的両立論に対する

批判は学会誌『科学基礎論研究』50 (2022)に収録された論文に依拠している)。本論文の積極的な立場を示した第６章で、これまで自由意志に関する議論とはあまり結びつけられることのなかった限定合理性に関する研究を取り入れている点は、今後の発展可能性を感じさせる。

審査の過程では、決定論と自由意志の両立問題の全体に対して、本論文の貢献がどのように位置づけられるのかについて説明が不十分であるとの指摘がなされた。特に、決定論を信じる者であっても合理性を損なうことなく考慮をなしうるとする「考慮両立論」の擁護が、余地と決定論の両立問題そのものにどのように寄与するのかが十分に論じられていないことや、考慮の前提となっている余地に関する常識的見解の部分的修正を提案する改定主義（revisionism）が、いかなるレベルの理論的ないし実践的な提案なのかが不明確であることなどが指摘された。しかしこれらの点は本論文の成果を踏まえた上での今後の課題と言うべきものであり、また、口頭試問を通して学位申請者が本論文の成果とともにその限界と残された課題についてもつぶさに把握していることが明らかになった。

以上を踏まえ、本審査委員会は本論文に示された申請者の研究成果を高く評価し、全員一致して学位申請者に博士（文学）の学位を授与することがふさわしいとの結論に達した。